

児童の動機づけを高める小学校外国語科の授業実践

—動機づけストラテジーと自己調整学習理論に着目して—

鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻教科・総合系英語科教育コース

指導教員 佐藤 美智子

土佐市立高岡第一小学校 教諭 速渡 恵理

【研究の概要】

本研究では、学習者の実態に応じた動機づけストラテジーと自己調整学習理論を取り入れた授業実践を行うことにより、外国語学習に対する児童の動機づけが高まることを検証することを目的とした。そして、実践を通して自己調整が促され、将来的な自律的学習者の育成に繋がるのではないかと考えた。そのために、動機づけストラテジーと自己調整学習理論に基づいた授業実践を2単元行い、その結果を検証した。

その結果、動機づけストラテジーや自己調整学習理論を取り入れた実践を行うことは、児童の外国語学習に対する動機づけを高め、主体的な学びを引き出し、自己調整力を育むために効果的であることが確認できた。

【キーワード】動機づけ、自己調整学習、自律的な学び、小学校外国語科

1 はじめに

(1) 研究背景

我々の社会はグローバル化の進展や絶え間ない技術革新、急速な社会変化に伴い、VUCA と呼ばれる予測困難な時代となっている。中央教育審議会答申（2016）において、これからの社会に生きる子どもたちに求められる力として、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、主体的に学び続けることで自らの能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり他者と協働したりして自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の造り手を育成していくことが重要であると示し、「生きる力」が改めて捉え直された。

これを受け、新学習指導要領（2017）は、子どもたち一人一人に育成すべき「生きる力」を、生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に整理し、具体的に示した。また、これらの資質・能力は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」により育成されるとしている。子どもたちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするため、子どもたちが「どのように学ぶか」という学びの質を重視した改善を図っていく必要がある。（中教審第197号 p.26）さらに、その配慮事項として、「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を取り入れる」（p.87）ことや「児童が学習の目的を自覚し、学習における進歩の状況を意識し、進んで学習しようとする態度が育つよう配慮する」（p.90）などの記述もある。つまり、これは、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」といった、主体的に学ぶ児童の姿に他ならない。

以上のことから、これからの学校教育には、変化に柔軟に対応する力や生涯学び続ける姿勢をもち、人生を生き抜く力を備えた人材の育成や、植阪（2012）が述べる「つまづいた時に自分で課題を発見し克服できる人」であり、「未知の知識・技能」に出会っても「自分で学び、獲得」できる自律的学習者の

育成が求められていると考える。この自律的学習者を育成する上で、Naiman et al. (1978) が、「外国語習得を成功づける要であり、動機づけは自律的学習を喚起し、学習行動を方向づけるための引き金であるといえる」と述べている。つまり、自律的学習者の育成への重要な核となるものが動機づけと言えよう。

(2) 研究の目的

本研究は、自律的な学習者の育成につなげるために、児童の動機づけを高める小学校外国語科の授業の在り方を探ることを目的とする。

2 先行研究の概観

(1) 動機づけプロセスモデルと動機づけストラテジー

Dörnyei (2001)は、言語教室の場面における『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』(Motivational Strategies in the Language Classroom) を提案し、動機づけの指導プロセスを4段階に分け、合計35の動機づけを高めるための指導ストラテジーを各段階に割り当てている。動機づけストラテジーについて米山・関 (2005) は、「個人の目標関連行動を促進する手法」であり「体系的で長続きするプラス効果を実現するために、意識的に与えられる動機づけの影響」と提言している。動機づけストラテジーの主たる4つの要素は「動機づけの基本的な環境を作り出す」こと、「学習開始時の動機づけを喚起する」こと、「動機づけを維持し保護する」こと、「肯定的な自己評価を促進する」ことである(Dörnyei,2001, 日本語訳: 米山・関, 2005)。西田 (2022) が、教師の役割として、学習者の特性に合わせて様々な方法で学習者の動機づけを高めるために、動機づけを喚起・維持・保護する方法を「仕掛けて」いくことと述べるように、置籍校の児童の実態を考慮しながら作成した『動機づけを高める英語指導ストラテジー』(表 2-1) を実践の中に取り入れていく。

表 2-1 動機づけストラテジー (Dörnyei (2005) をもとに筆者が作成)

① 動機づけの基本的な環境を作り出すストラテジー	
① - 1	生徒が達成できることに関し、十分高い期待値を持つ (2-3)
① - 2	教室に楽しく、支持的な雰囲気を作る (5)
① - 3	相互交流、協力、そして生徒間の本物の個人的情報の共有を促進する (6-1)
① - 4	最初の授業に緊張を解きほぐす活動を用いる (6-2)
② 学習開始時の動機づけを喚起するストラテジー	
② - 1	仲間のお手本を見せることで、言語に関連する価値観を高める (9)
② - 2	L2 学習過程に対する学習者の内在的な関心を高める (10)
② - 3	特定の課題および学習全般に関する生徒の成功期待感を高める (13)
② - 4	生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようになる (13-2)
② - 5	教育課程と教材を、学習者に関連の深いものにする (15)
③ 動機づけを維持し保護するストラテジー	
③ - 1	学習タスクやその他の指導にできる限り変化を持たせる (17-1)
③ - 2	タスクの魅力を増すことにより、学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする (18)
③ - 3	学習者が自分で具体的で短期の目標を選択することを奨励する (21-1)
③ - 4	学習者に定期的な成功体験を与える (23)
③ - 5	定期的に励ましを与えることにより、学習者の自信を育む (24)
③ - 6	学習者に多様な学習ストラテジーを教えることにより、自己の学習能力に対する自信を構築する (26)
③ - 7	学習者間の協力を促進することにより、生徒の動機づけを高める (28)
③ - 8	学習者自律性を積極的に促進することにより、生徒の動機づけを強化する (29)
④ 肯定的な自己評価を促進するストラテジー	
④ - 1	肯定的情報フィードバックを学習者に与える (32)
④ - 2	学習者の進歩の過程と、特に注意を集中すべき箇所について絶えずフィードバックを与える (32-2)
④ - 3	視覚的記録の作成を推奨し、様々な催しを定期的に行うことで学習者の進歩を目に見えるものにする (33-2)

(2) 自己調整学習における動機づけ

自己調整学習のプロセスとして、「予見段階、遂行段階、自己内省段階」の3つの段階(図 2-1)によって概念化されている。Zimmerman (2008) は、「予見段階」における目標や自己効力感、興味関心といった要因は、動機づけの主要な概念としている。中谷は (2012) は、目標設定は学習の生起や維持において大きな役割を果たし、できそうだという自己効力感も学習全体を通じて影響

を及ぼす要因であり、課題への興味も学習行動がいかに積極的、主体的に関与するかに関わる重要な要素としている。「遂行段階」では、課題をどのように認知し、解決するかという方略や選択の使用は動機づけに支えられている可能性が高い。さらに、「自己内省段階」においても、結果の自己評価や原因帰属など、次の動機づけを規定する起因が機能している。Schunk (1996) によると、学習の自己評価において、遂行を改善し、進歩した部分を評価する機会が多ければ、学習への自己効力感が高まり、達成が促されることがみいだされたとしている。

このように、自己調整学習の3段階において、動機づけの概念は「予見段階」で中心的な役割を有し、「遂行・自己内省段階」においても重要な機能を果たしていることが分かる。

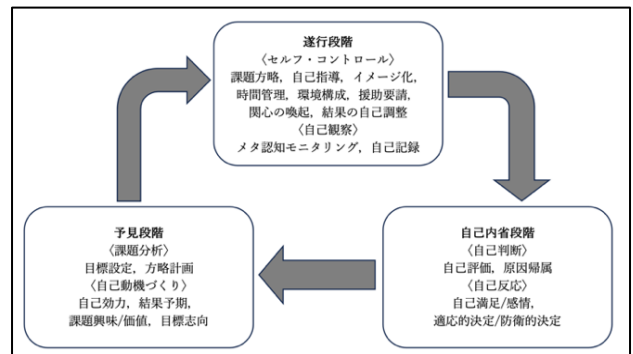


図 2-1 メタ認知過程と動機づけの基本的方法を統合した自己調整の循環的段階モデル (Zimmerman & Moylan (2009) を塚野 (2012) が改変)

3 実践研究の方法と実際

(1) 仮説

先行研究調査を踏まえ、本実践研究の仮説と具体に対する指導の手立て、計画及び方法、実践研究の実際についてまとめる。

仮説 学習者の実態に応じた動機づけストラテジーと自己調整学習理論を取り入れた授業を行うことにより、外国語学習に対する子どもの動機づけが高まるであろう。そのことにより、自己調整力を促し、自律的学習者の育成に繋がるのではないだろうか。

(2) 実践研究の方法

置籍校において6月から9月にかけて「話すこと（発表）」に焦点を当てた授業を2単元分計画し、実践を行った。授業実践IとIIでは、動機づけストラテジー（表3-1）と自己調整学習理論（図3-2）を授業に取り入れることとした。

表 3-1 動機づけストラテジー (Dörnyei (2005) をもとに筆者が作成)

自己調整の段階	児童の活動	実践Iで導入したストラテジー	実践IIで追加したストラテジー
予見	挨拶・歌	①-2, ①-4	
	Small Talk (指導者, 指導者と児童, 児童同士)	①-1, ①-3, ②-1, ②-4, ③-2	②-3, ③-1
	課題の確認	①-1, ②-4	③-3, ③-8
遂行	言語活動1 (児童同士)	①-3, ②-1, ②-4, ③-2, ③-7	③-1, ③-3
	中間指導	①-1, ②-1, ②-3, ③-4, ③-5, ③-6, ④-1	③-1, ③-3, ③-8, ④-2
	言語活動2 (児童同士)	①-3, ②-1, ②-2, ②-4, ③-2, ③-7	③-1, ③-3, ④-2
内省	振り返りタイム	③-5, ④-1	4-③

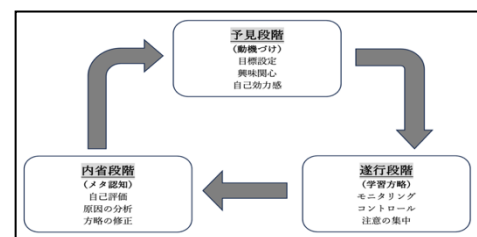


図 3-1 自己調整学習における3段階 (Zimmerman & Moylan (2009) をもとに筆者が作成)

(3) 実践研究の実際

ア 授業実践 I

「When is your birthday?」の単元において「友だちに自分のことをよく知ってもらうために、自分の誕生日や欲しいもの、好きなものについて紹介しよう」とゴールを設定し、全6時間で授業を行った。My birthday is ～. / When is your birthday? / I want / have / like～等の既習表現を用いて自分の誕生日や誕生日に欲しいもの、好きなものについて友だちと紹介し合う活動を行った。

(ア) 手立てと実際の児童の様子

【予見段階】導入した動機づけストラテジー

〈楽しく支持的な教室の雰囲気づくり：①-2，①-4〉

導入したストラテジー

- ①-2：児童が達成できることに関し，十分高い期待値をもつ
- ①-4：最初の授業に緊張を解きほぐす活動を用いる

毎時間の授業開始時には，全体で挨拶をし合うことや教科書に紹介されている歌を流したり前時に学習したキーフレーズを含んだチャンツに取り組んだりすることで，児童の緊張を解きほぐし楽しい雰囲気で授業に向かうことができるようにした。どの児童も歌やチャンツを楽しそうに口ずさむ姿を見ることができ，教師やALTと挨拶し合うことで児童の表情が和らぎ教室の支持的な雰囲気に繋がった。

〈学習への動機づけを高める Small Talk：①-1，①-3，②-1，②-4，③-2〉

導入したストラテジー

- ①-1：生徒が達成できることに関し，十分高い期待値を持つ
- ①-3：相互交流，協力，そして生徒間の本物の個人的情報の共有を促進する
- ②-1：仲間のお手本を見せることで，言語に関連する価値観を高める
- ②-4：生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようになる
- ③-2：タスクの魅力を増すことにより，学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする

Small Talk では，既習表現を用いて会話の手本を見せることや，どの児童も見通しをもって聞くことができるように Google スライドを作成して視覚的支援を行った。そうすることで児童は「自分もできそうだ」「〇〇について友だちと英語で話してみたい」という思いをもって活動に取り組むことができた。Small Talk のテーマ（話題）に関しては，児童の生活に身近であり既習表現を用いて話しやすい話題や本時の言語活動に繋がる話題を設定した。（表 3-2）

表 3-2 授業実践1で実施した Small Talk

時	Small Talk のテーマ
1	誕生月
2	誕生日
3	欲しいもの
4	好きなもの
5	持っているもの
6	自己紹介

〈学習への動機づけを高める課題提示：①-1，②-4〉

導入したストラテジー

- ①-1：生徒が達成できることに関し，十分高い期待値を持つ
- ②-4：生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようになる

第1時の学習では，児童が本単元の学習に対する見通しを持つことができるように「誕生月」に関する Small Talk を行い，教師の誕生月の話から児童を巻き込んで誕生月を問うことで「自分の誕生日を英語で伝えてみたい」という児童の思いや期待感に繋げた。また，児童にとって新出単語や表現がある際は，ICTを活用して視覚支援を行った。その結果，児童は集中して話の内容を予想しながら聞いたり興味を持って授業に参加したりする姿が見られた。

【遂行段階】導入した動機づけストラテジー

〈児童同士の言語活動 Activity1：①-3，②-1，②-4，③-2，③-7〉

導入したストラテジー

- ①-3：相互交流，協力，そして生徒間の本物の個人的情報の共有を促進する
- ②-1：仲間のお手本を見せることで，言語に関連する価値観を高める
- ②-4：生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようになる
- ③-2：タスクの魅力を増すことにより，学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする
- ③-7：学習者間の協力を促進することにより，生徒の動機づけを高める

課題提示後に行った児童同士の言語活動である Activity 1 では，まず児童が知っている英語を使って自分の力で話してみる機会を設けるようにした。自分ができたことや知りたい表現，困ったことを自覚させることで，課題意識をもって児童が中間指導に向かうことができるように意識した。課題設定に関しては，どの児童も自分ごととして活動に取り組むことができるように Small Talk と同様に児童にとって身近であり興味・関心に沿っており話しやすい話題を設定した。

〈学習改善に繋げる中間指導：①-1，②-1，②-3，③-4，③-5，③-6，④-1〉

導入したストラテジー

- ①-1：生徒が達成できることに関し，十分高い期待値を持つ
- ②-1：仲間のお手本を見せることで，言語に関連する価値観を高める
- ②-3：特定の課題および学習全般に関する生徒の成功期待感を高める
- ③-4：学習者に定期的な成功体験を与える
- ③-5：定期的に励ましを与えることにより，学習者の自信を育む
- ③-6：学習者に多様な学習ストラテジーを教えることにより，自己の学習能力に対する自信を構築する
- ④-1：肯定的情報フィードバックを学習者に与える

中間指導では2点のことに留意した指導を行った。

1点目は，できそうだと見通しをもたせる工夫である。中間指導では，「自分のことをよく知ってもらうために」といったように本時の目標に焦点を当てた指導を行ったことで，本時のめあての達成にはどんなことが必要か考えるきっかけとした。また，「困ったこと」や「もう一度確認したい表現」を全体で取り上げて共有することで，どの児童も自信をもって活動に取り組むことができるようにした。手本となる児童を教師が意図的に指名して全体共有することや児童に質問することで発表内容の充実を図ることに繋げた。中間指導後は，友だちの発表を見て，「自分も情報を付け足すことを真似したい」と発表内容の改善を図ろうとする児童の姿を見ることができた。

2点目は，個のニーズに応じた学習方略の選択肢を提示することである。自分の誕生日を友だちに伝えるために，月の言い方を練習する場面では，タブレットを使用して「言えた単語」と「もう少し練習が必要な単語」に分けて，自身の習得状況を可視化させることで練習の意欲づけを図ることや達成感に繋げた。また，第1時の学習でデジタル教科書の音声聞いて練習する方法を児童に伝えることで個の必要に応じた練習ができるようにした。第2時以降では，必要に応じてデジタル教科書を使用する児童や友だちと教え合ったり ALT に質問したりする児童の姿を見ることができた。

〈児童同士の言語活動 Activity 2 ①-3，②-1，②-2，②-4，③-2，③-7〉

導入したストラテジー

- ①-3：相互交流，協力，そして生徒間の本物の個人的情報の共有を促進する
- ②-1：仲間のお手本を見せることで，言語に関連する価値観を高める
- ②-2：L2 学習過程に対する学習者の内在的な関心を高める
- ②-4：生徒が課題の成功には何が必要とされるか正確に知るようにする
- ③-2：タスクの魅力を増すことにより，学習を学習者にとって興味深く楽しいものにする
- ③-7：学習者間の協力を促進することにより，生徒の動機づけを高める

中間指導後の Activity 2 では，中間指導後の練習タイムを受けて「今度はできそうだ」という成功期待感を持って活動に取り組む児童が増えた。児童が活動に対する達成感を味わうことができるようにするために，第3時の活動後に Google Forms を用いて一番多い誕生日の結果を全体で共有することや，第6時の発表会後は，ペアでお互いの成果を動画撮影し合い，学習の振り返りに活用できるようにした。成果を可視化することにより，児童は課題をやり遂げたことを喜んだり，自身の活動を具体的に振り返ったりすることができた。

【内省段階】導入した動機づけストラテジー

〈Reflection Sheet を活用した肯定的フィードバック：③-5，④-1〉

導入したストラテジー

- ③-5：定期的に励ましを与えることにより，学習者の自信を育む
- ④-1：肯定的情報フィードバックを学習者に与える

毎時間の授業で児童が記述した Reflection Sheet には，児童の振り返りに対してのコメントや，授業でのがんばりやできたこと，アドバイスを記入することで児童が自身の学びを自覚できるように心がけた。その結果，教師のコメント内容を受けて新たな学習課題を設定して学習に取り組む児童も増え

た。また、授業の終わりには、教師、ALT それぞれから児童ができるようになったことやよかった点をコメントするようにした。このように児童を励ましたり肯定的なフィードバックを与えたりすることによって、学習者の自信を育み、次時の学習への動機が高まるようにした。

イ 授業実践Ⅱ

「He can run fast. She can do kendama.」の単元において、「自分のことをもっと知ってもらうためにできること・できないことについて紹介しよう」という単元ゴールを設定し、全6時間で授業を行った。本単元の第5時では児童にとってより身近である学級の友だちについて紹介し合う活動を行った。そして、第6時では本単元の学習のまとめとして既習表現を用いて自分のできること・できないことについてロイロノートでスライドを作成してグループで紹介し合う活動を設定した。授業実践Ⅰを踏まえた改善点は以下の通りである。

- 改善点1：自ら学びを調整することに繋げるワークシートの工夫
改善点2：個別学習の支援ツールを強化

(イ) 手立ての実際と児童の様子

【予見段階】新たに追加した動機づけストラテジー (③-3, ③-8)

〈課題の確認 (My Goal の設定)〉

追加したストラテジー

- ③-3：学習者が自分で具体的に短期の目標を選択することを奨励する
- ③-8：学習者自律性を積極的に促進することにより、生徒の動機づけを強化する

本時の学習に対して、児童がより目的意識を持って学習活動に取り組むことができるように、「本時のめあて」の確認後にワークシート(図3-2)を使用して自身のめあて(My Goal)を自己決定させるようにした。ワークシート内に本時の目標や学習の流れを追加し、授業の流れに沿ったワークシートを作成することで児童が目標達成のために必要なことを自覚しながら学習に取り組むことができるようにした。



図3-2 授業で使ったワークシートの一部

【遂行段階】追加した動機づけストラテジー (③-1, ③-3, ③-8, ④-2)

〈中間指導 (自分の活動を振り返り、自己調整して「できた」に繋げる)〉

追加したストラテジー

- ③-1：学習タスクやその他の指導にできる限り変化を持たせる
- ③-3：学習者が自分で具体的に短期の目標を選択することを奨励する
- ③-8：学習者自律性を積極的に促進することにより、生徒の動機づけを強化する
- ④-2：学習者の進歩の過程と、特に注意を集中すべき箇所について絶えずフィードバックを与える

児童同士の言語活動である Activity 1 終了後は、実践Ⅰと同様に児童自身が活動を振り返る場面を設けたが、授業実践Ⅱでは、ワークシートを使用し、自分の活動への気づきを書き出すようにした。そうすることで、目標達成に必要なと思う表現やもっと言いたい表現など、自身の課題に気付くことができた。

中間指導内の練習タイムでは、授業実践Ⅰで取り組んだ学習者用デジタル教科書やロイロノートに加え、デジタル補助教材を作成することで練習方法に自由度をもたせて児童が練習方法を選択できるようにした。こうした教材を使用して個人練習をしたり友だちや教師、ALT と一緒に練習したりと、自分に合った方法で自己調整する姿が見られるようになった。また、必要に応じて繰り返し音声を聞いて真似したり練習したりすることで、児童の活動に対する自信へと繋がっていった。

【内省段階】追加した動機づけストラテジー (④-3)

〈振り返りタイム (動画や録音による記録)〉

追加したストラテジー

④-3: 視覚的記録の作成を推奨し、様々な催しを定期的に行うことで学習者の進歩を目に見えるものにする

児童の学習の足跡を視覚化し、児童自身が見返したり教師が共有したりするために、ロイロノートを活用して動画や音声を記録し、保存するようにした。その結果、振り返りの場面では、前時と比較しつつ、できるようになったことや今後の課題について記述するなど、目標に沿った具体的な振り返りを行うことができるようになり、そのことが、児童自身の達成感に繋がった。また、記録した動画や音声を Small Talk など言語活動の場面で見返して、表現等を確認する児童の姿も見られるようになった。

4 実践研究の結果と考察

(1) アンケート結果から見た児童の変容

〈動機づけにかかわる設問〉

図 4-1 から図 4-3 の結果より、実践研究前の 3 月と実践研究後の 10 月を比較すると、外国語 (英語) の授業に対する意識、外国語 (英語) に対する意識ともに、肯定的回答をした児童の割合が高くなっており、授業や英語に対する意識の高まりを確認することができた。

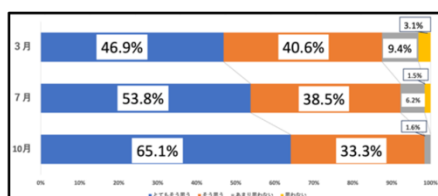


図 4-1 「外国語 (英語) の授業は好きですか」に対する児童回答

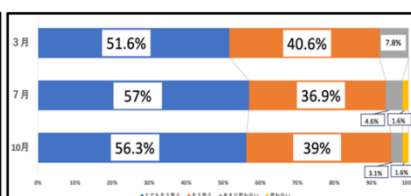


図 4-2 「外国語 (英語) の授業に進んで参加していますか」に対する児童回答

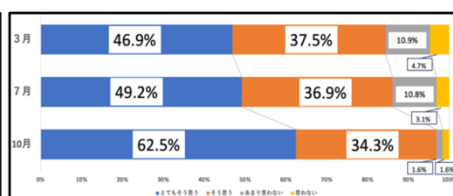


図 4-3 「英語が好きですか」に対する児童回答

〈自己調整にかかわる設問〉

図 4-4 から図 4-6 の結果より、自分のめあてや課題設定に関する項目、粘り強く課題解決に取り組む態度やメタ認知に関する項目においても肯定的回答の割合が上昇しており、児童の意識の変容を確認することができた。

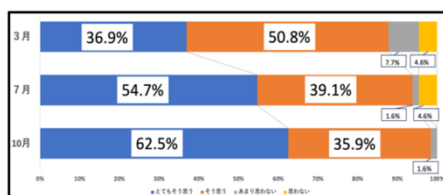


図 4-4 「授業において自分のめあてや目標をもって学習に取り組んでいる」に対する児童回答

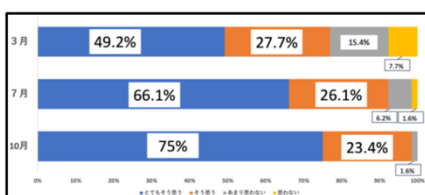


図 4-5 「困ったことや分からないことがある時は、あきらめずに解決できるようにしている」に対する児童回答

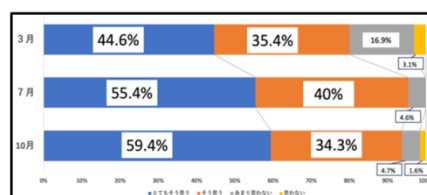


図 4-6 「授業や単元の終わりに自分ができるようになったことや課題など、めあての達成度について振り返りを行っている」に対する児童回答

(2) 自由記述から見た児童の変容

次に、「外国語 (英語) の授業は好きですか」の問いに対する回答理由について。関連性を検証するために共起分析を行い、共起ネットワークを作成した。実践前に調査した第 1 回目 (図 4-7) では、「英語」「楽しい」「話す」「ゲーム」「使う」等が関連している。KWIC コンコーダンスにおいて「楽しい」に関する児童記述を見ると、「英語を話すことは楽しいから」、「英語のゲームが楽しい」という理由が多かった。それに対して、実践終了後の第 3 回目 (図 4-8) では、「英語」「楽しい」「授業」「聞く」「話す」「友だち」を含めた言葉が関連しており、新たに「分かる」「友だち」「先生」「聞ける」の関連や、

「タブレット」「使う」「学べる」「グループ」「伝える」「面白い」等の関連も確認することができる。KWIC コンコーダンスより、「英語を使って友だちと話したり聞いたりする活動が楽しい」「友だちと英語を使ってお互いのことを話すことが楽しい」といったように相手意識をもったやり取りに関する記述や、グループ活動やタブレット端末を活用した学習に関する記述も見られた。

以上の結果より、動機づけストラテジーと自己調整学習理論に着目した実践を行うことにより、児童の学習に対する動機づけを高めることにつながっていることが確認できた。また、学習に対する動機づけが高まったことで、学習の仕方に対する意識についても変容を確認することができた。

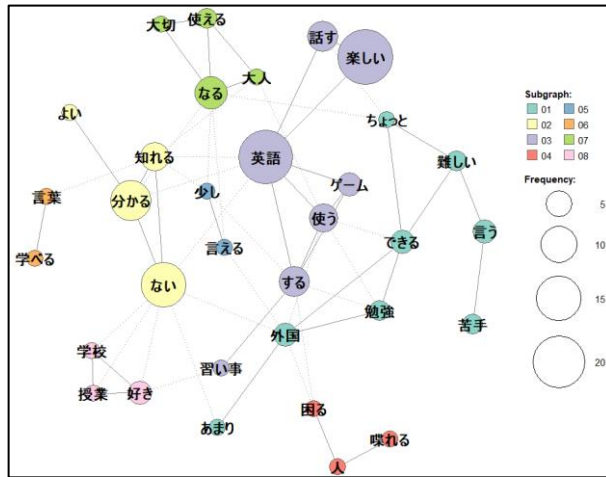


図 4-7 第1回「外国語（英語）の授業は好きですか」に対する児童の記述 共起ネットワーク

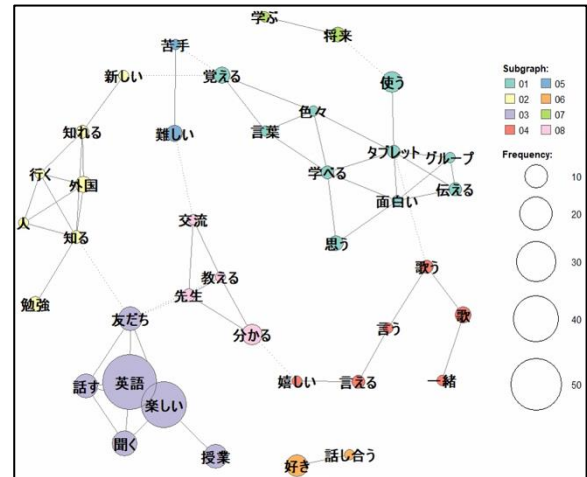


図 4-8 第3回「外国語（英語）の授業は好きですか」に対する児童の記述 共起ネットワーク

5 実践研究の成果と課題

(1) 実践研究の成果

〈学習に対する動機づけについて〉

英語や外国語の授業に対する動機づけが高まり、主体的に授業に取り組んだり、友だちと関わりながら英語を使ってコミュニケーションを楽しんだりする姿が見られるようになった。

上記のアンケート結果から、英語や授業への好感度が高まるとともに、授業に積極的に参加していると自覚している児童が増えたことが確認できた。実際の授業においても、実践前にはどちらかといえば受動的で、英語を使ったコミュニケーションに消極的な傾向が見られた児童が学習を進める中で、自ら友だちと関わり、自分のことを意欲的に伝える様子が見られるようになった。また、毎時間の振り返りシートからも、児童自身が成長を自覚していることや、次の学びへ向かおうとする肯定的な記述が増えたことが伺える。さらには、ALT とのおしゃべりタイムに関する事前事後のアンケート調査から、英語を使用したコミュニケーションへの達成感や今後に向けての意欲の高まりが確認できた。

〈自己調整について〉

児童自らが課題をもち、課題解決に向けて試行錯誤し、自身の学びを振り返りながら、学習を調整しようとする態度が育ってきた。

10月に実施したアンケート結果からは、9割以上の児童が課題意識を持って学習に取り組むことができたという回答している。実際の授業や振り返りシートの記述からも、前時の振り返りから自分の成長や課題を自覚し、本時の目標設定を行い、目標達成に向けて必要な方法や情報を選択しつつ粘り強く自己調整しようとする児童の姿を見取ることができた。

以上の成果から、動機づけストラテジーや自己調整学習理論を取り入れた実践を行うことは、児童の外国語学習に対する動機づけを高め、主体的な学びを引き出し、自己調整力を育むために効果的であることが確認できた。

(2) 実践研究の課題

課題としては、わずか2単元の実践であったこともあり、上記の成果がすべての児童に見られなかったことである。様々な背景により多くの課題を抱える児童もいる。今後は、さらに児童に寄り添った個別支援の方法について考えていきたい。また、児童の動機づけが高まり、自己調整しようとする態度が育成されたものの、その基盤となる「知識・技能」の定着が十分図れなかったことも課題として挙げられる。言語活動を重視しながら個人にニーズに合った練習に時間も確保し、そのバランスに配慮しながら基礎的な技能の習得を図っていきたい。

(3) 今後の取り組み

今後も本研究での成果と課題を活かしながら授業改善を図るとともに、教職大学院が求める「理論と実践の往還」の視点から小学校外国語について探究しながら、外国語教育の発展に貢献することができればと考えている。

引用・参考文献

植友友理【対談】自律した学習者を育てるために生徒の学習観を変える『VIEW21 中学版 2012Vol.3「自律的な学習者」を育てる学び方指導』(pp.6-11) Benesse 教育研究開発センター (2012) .

ゾルタン・ドルニエイ (著) 米山朝二/関昭典 (訳)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店 (2005) .

塚野州一「自己調整学習理論の概観」自己調整学習研究会 (編)『自己調整学習-理論と実践の新たな展開へ-』(pp.3-29) 北大路書房 (2012) .

中谷素之「動機づけ」自己調整学習研究会 (編)『自己調整学習-理論と実践の新たな展開へ-』(pp.55-71) 北大路書房 (2012) .

西田理恵子 (編)『動機づけ研究に基づく英語指導』(pp76-81) 大修館書店 (2022) .

文部科学省「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) (中教審第 197 号) .

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2016) (2024 年 1 月 30 日)

文部科学省「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申) (中教審第 228 号)」 .

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm (2021) (2024 年 1 月 30 日)

文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編』. 東洋館出版社 (2017) .

Dörnyei, Z. *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge University Press (2001) .

Naiman, N., Frohlich, M., Stern, H.H. & Todesco, A. *The good language learner*. Modern Language Centre, Ontario Institute for Studies in Education. (1978) .

Schunk, D. H. Goal and self-evaluative influences during children's cognitive skill learning. *American Educational Research Journal*, 33,359-382. (1996) .

Zimmer, B. J. Goal setting: A key proactive source of academic self-regulation. In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.) , *Motivation and Self-regulated learning: Theory, research, and applications*, Routledge. pp.267-295. (2008)

Zimmerman, B. J., & Moylan, A. R. Self-regulation: Where metacognition and motivation intersect. In D. J. Hacker, J. Dunlosky & A. C. Graesser (Eds.) , *Handbook of metacognition in education*. New York: Routledge. pp.300-305. (2009) .

様式 4